

サムエル記下 19 章 2～15 節

2025 年 11 月 12 日(水)

はじめに

本日は 19 章 2 節から 15 節までを学びます。この箇所から「都落ち」したダビデが再びエルサレムに戻る記事が始まります。20 章 3 節でダビデが王宮に戻ったことが、報告されています。

さて前回学んだように、アブサロムが率いるイスラエル軍とダビデが率いる軍とが戦い、ダビデの軍が大勝利をおさめました。しかしこの戦争では、ダビデの息子アブサロムが討ち死にしました。これはダビデにとって大変な痛手だったわけです。ダビデは悲嘆にくれ、アブサロムの名を呼んで泣き続けました。この「悲嘆にくれるダビデ」から「イスラエル全体の王としてのダビデ」への変化が、本日の個所で語られています。

I サムエル記下 19 章 2～15 節の話の流れ。

そこでサムエル記下 19 章 2 節から 15 節までの話の流れを見てみましょう。

2 節は、ダビデがマハナイムの「城門の上の部屋」にこもってアブサロムの死を嘆き悲しんでいるという様子が、將軍ヨアブに知らされたという記事です。それに伴って、3 節では、すべての兵たちにとっては、凱旋するはずが、喪の日になったといわれています。兵たちは、まるで「**戦場を脱走して来たことを恥じる兵士が忍び込むようにして、こっそりと町に入った**」わけです。5 節では兵たちが帰還する最中でも、ダビデは「城門の上の部屋」にこもって嘆いている様子が語られています。「**大声で**」とありますから、ダビデの嘆き悲しみは兵たちも聞こえたと思われます。

そこで 6～8 節で、將軍ヨアブがダビデ王のもとに行き、意見をします。6～7 節では、ヨアブの叱責です。8 節は「城門の上の部屋」から出て、「城門の席」につき、帰還兵たちを迎えるべきことを告げました。9 節は、ヨアブの忠告に従い、ダビデが王として立ち上がり、城門の席につき、帰還兵を迎えたことを告げています。しかしここではダビデがどんな労いの言葉を語ったのか、何一つ書いてありません。ただ息子の死を負った王が、さらにヨアブの罪を負った王が、兵たちの前に姿を現したわけです。

そのように兵たちがダビデ王の前に集まったのと対照的に「**イスラエル軍はそれぞれ自分の天幕に逃げ帰った**」わけです。つまり自分たちの町に戻ったのです。

10～11 節では、そのイスラエルの諸部族が、ダビデ王のもとに戻るべきかどうか議論したという記事です。アブサロムが死んだ今、ダビデ王を連れ戻そうという意見が大勢を占めたわけです。その際、最初にダビデ王が自分たちのためにしてくれたことを思い起こしています。つまりそれまでアブサロムの偽情報に絡めとられていましたが、それが取り除かれ、改めてダビデ王という人物を知った、ということです。

12～15 節では、ダビデ王が、ユダ族の長老たちに、自分を王宮に連れ戻すようにと働きかけています。それは、ダビデがイスラエル諸部族とユダ族の両方の王として建つためなのです。言い換えるとダビデは一つである神の民の分裂を回避したのです。またそのためのシンボルとして敵側の將軍だったアマサを軍の司令官とするといっています。こうして 15 節にあるように、ユダ族の人々は、「**家臣全員と共に帰還してください**」とダビデ王に伝えたのです。

以上のように 10～15 節では、ダビデ王は戦争に勝った者として自らが出ていくのではなく、逆にイスラエル諸部族にもユダ族にも、自分を王として迎え入れるように促しています。イスラエ

ルの王は、世俗の王のように武力によって王権を確立するのではなく、イスラエルの民全体が「ダビデは神が王として立てた方である」という信仰によって、王権が確立するからです。

以上の話の流れを箇条書きにすると、以下のようになります。

19 章 2～9 節 ヨアブ、悲嘆にくれるダビデを叱責し、王として帰還兵を迎えるように勧める

19 章 10～11 節 イスラエル諸部族、議論を重ね、ダビデ王を連れ戻すことにする。

19 章 12～15 節 ダビデ、ユダ族に、自分を王として連れ戻すようにと告げる。

Ⅱ. サムエル記下 19 章 2～15 節の解説

【2～5 節】

ここはダビデ王が、マハナイムの町の「城門の上の部屋」に引きこもって嘆き悲しんでいることが背景にあります。その報告はヨアブにも届きました。ヨアブは通常なら凱旋將軍として兵たちとともにマハナイムに帰還するつもりだったはずですが、しかし肝腎の王が出迎えてくれないのでは、凱旋できません。また兵たちにもダビデが嘆き悲しんでいることが伝わりました。ですから兵たちも勝利の喜びは、まるで喪の日ようになってしまいました。

もともとダビデは、そのようにならないために反乱軍の大將であり自分の息子であるアブサロムを、生け捕りすることを命じたのですが、ヨアブはその命令に背き彼を殺してしまったわけです。

こうして兵たちは、まるで脱走兵が恥を抱えつつ忍び込むようにして、こっそり町に帰還したわけです。そうすると、「城門の上の部屋」からダビデ王が、わが子の死を、大声で嘆き悲しんでいるのか聞こえてくるわけです

そこでヨアブは、ダビデの姉ツェルヤの息子であり、ダビデの甥でもあることも手伝ってのことでしょう、彼は「城門の上の部屋」に上って行きダビデを叱責します。以下、箇条書きにします。

①王は、今、あなたと、あなたの家族の命を救ったあなたの家臣全員に恥をかかせた。

②あなたは、あなたを憎むものを愛し、あなたを愛する者たちを憎むのか。

③わたしは、今日、自分も兵たちもあなたにとって無に等しいと知らされた。

④アブサロムが生きていて、我々全員が死んでいたら、

あなたの目に正しいと映ったのでしょうか。

以上のように、ヨアブは畳みかけるように叱責しました。これは、一見するともっともなことであると思われます。ダビデは確かに私情に溺れて悲しみ、王としての務めを忘れていたからです。公私混同をしているわけで、これは今日の社会で起こって混乱をもたらすことは、わたしたちも承知していることです。

しかし果たしてそのように受け止めてよいのでしょうか。まずヨアブは、ダビデ王の「アブサロムを生け捕りにせよ」という命令に背きました。軍人としての自分の判断を優先し、アブサロムを殺害したのです。ヨアブは、ダビデを叱責する場合も、そのような軍人としての判断を優先したままです。彼は、アブサロムを、単純に、これだけの反乱を起こしたのであるからダビデを憎む敵と決めつけています。だから殺してもよいという立場なのです。ですからヨアブには、アブサロムが、油注がれたダビデ王の子であることはよく見てえていません。

他方、ダビデはどうでしょうか。彼は、自分を憎む敵である者が同時に自分の愛するわが子であるという矛盾を抱えたままなのです。この矛盾は、私情によるといわれれば私情によるに違いあ

りません。けれどもわたしたちは、父なる神がわたしたちを見つめるとき、ちょうどダビデと同じ矛盾を抱えもっているのではないのでしょうか。父なる神にとっては、ご自身に刃向かう敵であるわたしたち罪人が同時に神の子たちなのです。ここに神の抱える矛盾があります。だからこそ父なる神は、御子イエス・キリストにおいて裁きをとおしての救いをもたらしました。そう考えると、ダビデは、父なる神の矛盾を、身をもって指し示す役目を負っているということができるのではないのでしょうか。

しかしヨアブに代表されるこの世の論理は、王の敵はたとえ王子であっても殺せということです。さらに単純に言えば「敵は滅ぼせ。それが正義である」ということになります。そしてそのことに王たる者は私情をさしはさむべきでないということなのです。そこには矛盾はありません。首尾一貫しています。しかしそこには、神御自身の抱える矛盾を見つめることはありません。

ヨアブはそのような立場からダビデを叱責した後、8 節以下で、ダビデが「城門の上の部屋」から出て下におり、城門の席にいて兵を迎えるようにと勧めます。ヨアブにはダビデ王に対する兵の忠誠心が離れてしまうことを分かっているからです。

そこで 9 節ではダビデがヨアブの忠告を聞き入れたので、「王は立ち上がり、城門の席に着いた」というのです。さてこの「王」という言い方は、6 節で出て来て、この 9 節でもでてきました。ここで考えたいのは、ダビデの考える王とヨアブの考える王には違いがあるということです。ダビデが体現しているイスラエルの王とは、「わたしの滅ぼすべき敵はわたしの息子である」という矛盾を抱えた王なのです。この時、ダビデは自分が敵を滅ぼすとは考えていません。かつてサウル王に追撃されたとき、ダビデはヨアブたちがサウルを殺すチャンスがあつたのに、それを制止しました。神が立てた王を裁くのは、神御自身であるからです。このようにダビデは敵に対する裁きを神に委ねたわけです。しかしヨアブは単純です、「敵を滅ぼせ、それが正義である」という立場であって、そこには神の裁きを待ち望むという信仰はありません。ヨアブは、今回、ダビデの命令に背き、アブサロムを殺害したわけです。そうすると、ダビデは、罪人であるわが子の死を悼む王であり、さらにヨアブに代表される罪を身に負っている者なのです。

こうしたダビデ王の姿が、真の王である十字架のイエス・キリストを指し示しています。この方はわたしたちにかかわって罪を負い、神の裁きを引き受けて死に、罪の赦しをもたらしているからです。

しかしヨアブの考えるイスラエルの王とは、世俗の王に似て、「王権に逆らう者は滅ぼすべし」という王です。ダビデのように神の裁きを待つことを知らない王なのです。

そして今、ダビデは「城門の席に着き」、矛盾という傷を負った王として兵たちの前に姿をさらしています。「城門の席」は、特別な場所です。裁判が行われる場所でありました。ですから町の長老や祭司がそこに座って裁判を行いました。それにならって王が着座する場所でもあります。そこに座ったダビデはどんな顔をしているのでしょうか。晴れやかな笑みを浮かべる王でしょうか。そうではないはずです。深く悩みつつ、しかし心から感謝しつつ兵を迎える顔ではないのでしょうか。

【9 後半～12 節前半】

さてそのように兵たちがダビデ王の前に集まりましたが、イスラエル軍は、それぞれの天幕に逃げ帰りました。そしてイスラエル諸部族の間で、今後どうすべきかについて議論を重ねたようです。その議論の一端が、10 節～11 節でいわれています。

まずイスラエル諸部族はダビデについて思い起こすことから始めています。箇条書きにします。

- ①ダビデ王は敵の手から我々を救い出した。
- ②ダビデ王は強敵であるペリシテの手からも救い出した。
- ③しかしダビデ王は国外に逃げている。アブサロムの反乱のためである。
- ④今、われわれが油を注いで王としたアブサロムは戦いで死んでしまった。
(明らかに神は、ダビデを王としておられる。)
- ⑤それなのに、なぜあなたがたは黙っているばかりなのか。(悔い改めて、)ダビデ王を連れ戻さないのか。

以上のように議論を重ねたわけです。()は理解のために筆者が補った部分です。イスラエルの諸部族は、反乱が終わって来て、はじめて目からうろこが落ち、真のダビデ王の姿を見ることができたのではないのでしょうか。ここで注目すべきは④です。わたしたちは、ここで初めてアブサロムが油注がれたことを知るのです。アブサロムや顧問官であったアヒトフェルの記事には、油の注ぎについて一言も触れられていませんでした。ここにアブサロムとイスラエル諸部族の意識の差のようなものがあるのではないのでしょうか。つまりアブサロムとアヒトフェルは、神が王を立てるといことを真剣に受け止めておらず、イスラエルを世俗の権力者として理解するにとどまります。

【12～15 節】

こうしたイスラエル諸部族の動向がダビデ王の耳に入ってきました。他方、ユダ族の方について何の動きもありません。そこでダビデは、祭司ツァドクとアビアタルをユダ族に派遣して、次のようにいいます。以下過剰書きにします。

- ①あなたたちは、王を王宮に連れ戻すのに遅れをとるのか。
 - ②あなたたちは、わたしの兄弟、骨肉ではないか。王を連れ戻すのに遅れをとるのか。
 - ③イスラエル軍の将軍であったアマサは、わたしの骨肉ではないか。
- ヨアブに代えて、これから先ずっと、お前をわが軍の司令官に任じる。

以上のようにあります。①と②は、ユダ族に対してダビデ王をエルサレムの王宮に連れ戻すようにと告げています。この部分は、「遅れをとるのか」と二度いって、イスラエル諸部族と競わせるようなニュアンスがあります。けれども果たしてダビデは競わせようとしたのでしょうか。

ダビデの念頭にある危機感は、アブサロムの反乱により、イスラエル諸部族とユダ族の間に分裂が決定的になる、ということでした。ダビデは、これまでこうした分裂を避けるために配慮し行動してきたわけです。一つの神の民であるイスラエルが神の御心になかったことだからです。そうしてみると、ダビデの言葉は、一つの神の民への促しと受け取るべきではないのでしょうか。

また③についても同じことがいえます。マアサはダビデの姉アビガイルの息子でした。アブサロムの反乱においてはイスラエル軍側の司令官になっていました。しかしその戦が終わった今、ダビデは、マアサをヨアブに代えて全イスラエルの将軍に据え、一つの民としようとしたわけです。

こうしてダビデは、「ユダのすべての人々の心を動かして一人の人の心のようにした」のです。明らかにアブサロムの反乱の影響で、ユダの人々の心も、バラバラになっていたわけです。

しかし祭司ツァドクとアビアタルがダビデの言葉を伝えると、彼らは、「家臣全員と共に帰還してください」とダビデに言いました。こうしてダビデは、世俗的な王のように武力を誇示しつつエルサレムに向かって進もうとするのではなく、イスラエルの民が「神はダビデを王として立てている」という信仰にもとづいて、マハナインからエルサレムに向かって出発するのです。